

# 明治18年大阪水害のかわら版について

—1885 (明治18年) 年淀川大水害の研究 その3—

植 村 善 博

〔抄 録〕

On the Tile Block Prints of 1885 Osaka Flood Disaster

—Studies on 1885 River Yodo Big Flooding (Part3)— Yoshihiro UEMURA

1885 Osaka flood disaster is one of the biggest natural disaster attacked Osaka. 81 persons died, 1,749 houses destroyed and 72,509 houses inundated were resulted from 1885 flooding. Many tile block prints of this flood disaster were published, but there is not comprehensive research on this flood yet.

The purpose of this paper is to discuss the character of tile block prints just after 1885 flood disaster. The following results were obtained:

- 1) This flood is divided the first in the latter of June from the second in the early July. Seventeen tile block prints were published, and three of them were of the first flood, and fourteen were of the second flood. Fifteen tile block prints described maps of many kinds. And twelve were showing extent of inundated area.
- 2) Information on traffic interruption by broken bridges was the most important and informed very quickly. Number of broken bridges were twenty in 2th~3th July, thirty in 6 th and forty in 12 th. Number was increased day by day and it is quite likely that about forty bridges in Osaka and its surroundings were broken.
- 3) Tile block prints were most valuable because of its lower cost and easy availability for common people. But after this flood, tile block print was quickly replaced by newspaper that is superior in volume and quality of information to that.

**Keyword :** 1885 Osaka flood disaster, tile block print, map, newspaper

## 1. はじめに

明治18年の淀川大水害は享和2年とならぶ最大規模のもので、大阪府下を中心に広域的な被害が生じた。本水害は 1) 明治政府や地方自治体による組織的な調査や対応、復旧事業の実施や公的報告書が出版された初期の事例であること、2) 新聞や写真類によって被害状況が記録・報道され、新聞による義捐金募集がおこなわれた最初期の事例であること、3) 淀川流域の住民運動が高揚し国営淀川改良工事の実施や河川法が制定される契機となったことなど地理的・歴史的に重要な意義をもつ災害である。

本水害の公的記録として大阪府（1887）『洪水志』があり、武岡（1931）や左岸水害豫防組合（1934）、淀川百年史編集委員会（1974）、坂（1992）、服部（1995）などに記述がある。一方、明治前期の災害写真やメディアの対応について金子（2005）、北原（2006・2012）らが考察している。植村（2016）、植村・木谷（2016）は大阪歴史博物館、大阪府立中之島図書館、山口県公文書館などが所蔵する本水害写真92枚を検討し、43点のオリジナル写真が存在すること、2冊の水害写真帳は当時のものではなく後に収集者がアルバムに仕立たものであることなどを明らかにした。一方、当時はかわら版と新聞が混在する時期にあたっており、北原（2001）は災害ジャーナリズムの視点よりかわら版、伊東（2012）は京都の火災図について考察している。しかし、本水害に関するかわら版について総合的に研究した報告はない。本稿では明治18年水害のかかわら版について検討し、その特徴や情報の内容、新聞記事との比較について考察した結果を報告する。また、今後の研究に資するため代表的なかかわら版をカラー写真で紹介したい。

## 2. 明治18年大阪水害の概要

本水害の概要を大阪府編『洪水志』および植村（2016）により要約しておこう。なお、大阪周辺の浸水域と浸水深（m）の概要を図1に<sup>(1)</sup>、6月15日から7月6日まで22日間の淀川水位の変化を図2に<sup>(2)</sup>示す。

### 1) 時間的経過

明治18年6月15日から17日にかけて低気圧の通過に伴う豪雨が続き、17日午後には毛馬水位が3mを超え、18日3～4時には最高水位の3.8mに達した。このため、17日20時30分に岡新町の天野川が決壊、23時頃に伊加賀の山川堤防が決壊、樋門より淀川が逆流し堤内および堤外の流水により淀川堤防が20間余破壊された。伊加賀村の30数戸と人畜が流出し、下流の茨田、讃良両郡内を濁流が流れ下った。淀川水位は18日朝から次第に低下し、19日午後には2m程度になった。しかし、伊加賀切口は19日に50～60間に拡大、浸水域は東成郡北部一帯まで拡大した。寝屋川の横堤防は水防作業により破堤をまぬがれた。これを第1水害とよぶ。茨田、讃良、

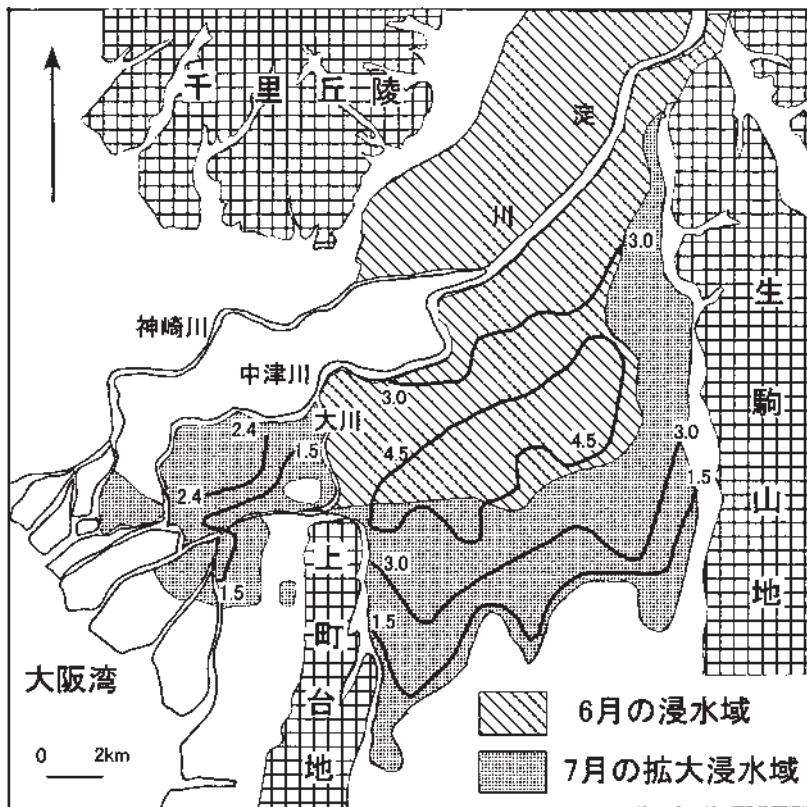


図1 明治18年大阪水害の浸水域と浸水深度(数字の単位はm)、注(1)により作成

東成各郡の浸水の長期化は被害を深刻化せることが危惧される。建野郷三知事らは野田村網島に出張所を置き、網島大長寺裏の字わざとときりにおいて大川堤防を切開き、内水を排除した。堤切の作業は20日から約1100人の役夫を集めて幅5間の溝を掘った。21日に約10間、23日午前には26間に達した。

一方、伊加賀決壊部の堰止工事は船運により工事資材を集め、土豚と粗朶工による沈床を延長させて仮堤防をつくる作業を実施した。25日には工兵隊が飛橋工事を始め、囚人100余人を使役して土豚造りに従事させた。同日13時30分建野知事らが船で枚方に到着、翌26日19時に切所の飛橋が完成した。27日には東部から約30間、西部から約28間の築堤を延長させたが、約20間が未完成のままであった。被災地を視察した伊藤博文宮内卿の奏上により30日に大阪府へ3千円の下賜金が決定されている。

6月27日夜から再び雨となり、28日には台風に伴う連続的豪雨となる。同29日から風が強まり、7月1日に暴風雨となった。このため淀川水位は30日から再び急上昇、30日深夜に3mを突破し8月1日深夜から2日早朝に4.8mの最高水位に達している(図2)。伊加賀の仮堤防が30日に60間以上にわたり再決壊して濁流が流入、同日夕刻には寝屋川堤防を越流、徳庵で堤防

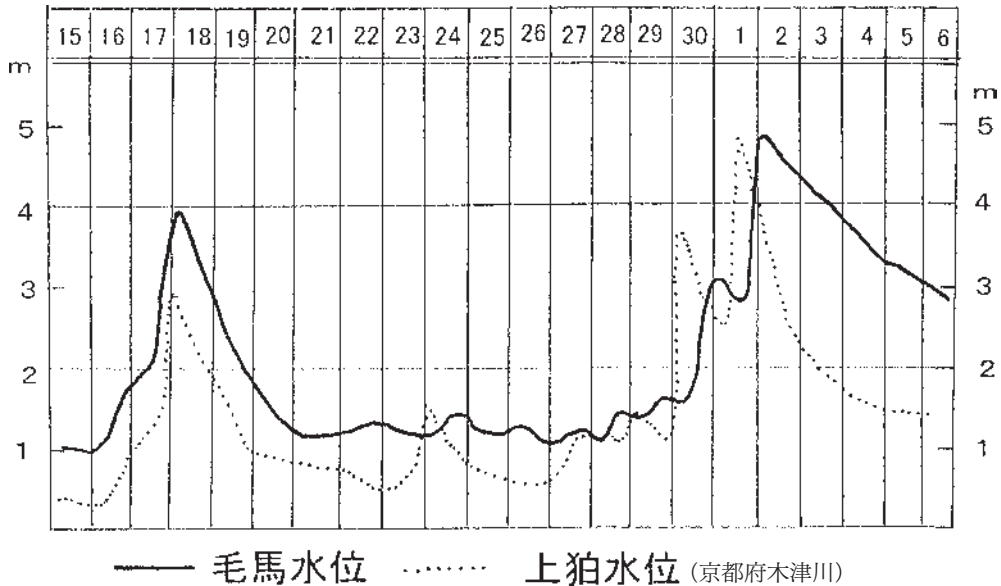


図2 明治18年6月15日～7月6日間の淀川水位の変化、注(2)により作成

が破壊された。このため南方へ流れ下った濁水は7月1日から3日午後にかけて若江、河内、渋川など南部諸郡の広い範囲に氾濫、淀川と大和川間の河内平野一帯が湖水状態になった。また、1日夕刻には土佐堀川や堂島川の水位が上昇して溢流、市街地に氾濫した。2日朝には造幣局付近の越流により市街地の浸水が拡大、梅田では水深約1.2m以上に達した。桜宮付近では大川堤防が3カ所で決壊した。天満橋、天神橋、難波南橋、淀屋橋、安治川橋（滞流が著しいため軍により爆破）など大川に架かるほとんどの橋が流出、破損して南北間の通行が不能になった。これらを第2水害とよぶ。

第1水害時の毛馬水位は3.8m、茨田郡の浸水高度は3.5mで寝屋川堤防下まで浸水した。第2水害の毛馬水位は4.8m、茨田郡の浸水高度は約4mと第1水害より高い。このため、寝屋川堤防が破壊され浸水域は南部へ拡大、東は恩智川堤防付近、南は池島、瓜生堂、小若江、蛇草、正覚寺など旧大和川流路に挟まれた後背湿地まで水没した（図1）。大阪市街地は主に第2水害により上町台地と天満、船場、島之内などの砂堆微高地を除き広い範囲が浸水している。生駒山地と上町台地間の河内平野の浸水面積は約180km<sup>2</sup>、水深4.5m以上の激甚地の面積は約35km<sup>2</sup>にも達した。これは今日の城東・鶴見両区と門真・大東両市の範囲に一致し、地盤高約1m以下の土地に相当する。また、淀川下流部西区、西成区などの浸水も約36km<sup>2</sup>に及ぶ。

## 2) 被害の地域的特徴

第1水害と第2水害による大阪府下の被害状況は死者不明者81名、流出戸数1,749戸、浸水戸数約72,509戸、被災人口約30.4万人に達した。さらに、救民員数約7.8万人、橋流出512カ所、

堤防決壊224カ所、総損亡代償は338万7097円に達する膨大なものであった（大阪府 1887）。茨田、東成両郡は伊加賀切に伴う流水による直撃を受け死者は合わせて52名と全体の77%を占める。流失戸数も90%に達し圧倒的に多い。浸水戸数は西区の23,116戸と西成郡の14,253戸が多く、合わせて全体の52%に達する。一方、被災者は西区の8.3万人と西成郡の6.2万人が多く、ついで北区および茨田郡の3.4万人、東成郡の2.8万人の順になる。浸水被害が西区や北区、西成郡で深刻な理由は、大阪湾で発生した西風による高潮が臨海低地の防潮堤を越え、淀川の洪水流と複合して西部低地の人口稠密地域を浸水させたからである（図1）。

### 3. かわら版とその特徴

かわら版は一般に江戸時代に発生した事件や災害を報道するため1枚の紙に印刷し、出版許可を受けずに発行したものと理解される。明治18年水害時には出版許可を受けた多くのかわら版が発行され、今回の調査で17点が確認された<sup>(3)</sup>。表1および表2は出版月日の順にその特徴を整理したものである。タイトルは主題とつぎに副題を示す。色彩は3色以上を多色刷とする。所蔵者は閲覧したものを示した。以下、表1および表2に従って内容を検討していく。

- ① 河内摂津大水のうわさ 最も早く6月23日に出版されたもの（図3）。京都上京区二十二区黒田一知が出版、大阪の藤下茂三郎を売捌人とする。地図は北を上置き、枚方から造幣局、川崎橋までの淀川と左岸低地を示し、右端に生駒の山並を描く。伊加賀の切所から低地

表1 明治18年大阪水害のかわら版の特徴（その1）

番号	タイトル	横×縦(cm)	色彩	御届	出版	発行者	所蔵者
1	河内摂津大水のうわさ	36.5×26	黒青	6月	6月23日	黒田一知	東京大学地震研究所
2	大洪水	21×38	多色刷	6月23日	6月24日	田中安治郎	大阪城天守閣
3	大洪水・大阪府下洪水遭難 賑恤金表	52×38	多色刷	6月23日	6月29日	田中安治郎	大阪市立中央図書館
4	大洪水之図	37.4×48.1	黒赤	7月2日	7月2日	木村松之助	大阪城天守閣
5	摂河大洪水記聞 極本しらべ	52×38	黒青	7月2日	7月3日	田中安治郎	大阪市立中央図書館
6	大洪水細見之図 本しらべ	68.2×53.5	多色刷	7月2日	7月3日	黒田一知	刈谷市刈谷図書館
7	大阪市中前代未聞大洪水之 略図	51.5×38	多色刷	7月4日	7月6日	樋口新助	三井文庫
8	河内大阪近在本しらべ大洪水 之図	54.2×39	黒赤	7月6日	7月6日	石川萬助	大阪府立中之島図書館
9	各国洪水飛報	37.9×52.6	黒	7月6日	7月7日	瀬原捨松	大阪市立中央図書館
10	攝河両国大洪水細見図	70×55	多色刷	7月7日	7月7日	木村栄次郎	岐阜県図書館
11	大洪水細見之図 第貳号本 しらべ	66.3×49.5	多色刷	7月7日	7月10日	黒田一知	大阪市立中央図書館
12	大阪攝河大洪水図	77.6×36.8	多色刷	7月7日	7月10日	野口清兵衛	大阪市立中央図書館
13	暴雨洪水落橋砲発ノ画	17×38	黒	7月9日	7月10日	木村板	大阪府立中之島図書館
14	浪華大洪水一覽図	29×38.8	多色刷	7月11日	7月11日	白井貞次郎	大阪府立中之島図書館
15	大洪水末代断 第五号極細調	72×53.6	多色刷	7月9日	7月12日	藤下茂三郎	大阪歴史博物館
16	攝河大洪之図	49.5×37	多色刷	7月9日	7月15日	土岐篤太郎	大阪市立中央図書館
17	河内摂津大洪水細見図	52×69	多色刷	7月17日	7月18日	山本壽一郎	大阪市立中央図書館



表2 明治18年大阪水害かわら版の特徴（その2）

番号	タイトル	説明文	落橋名	地図	地図タイプ	図上方の方角	浸水域	落橋位置	定価
1	河内摂津大水のうわさ	○	×	○	A	北	○	○	2 銭 5 厘
2	大洪水	○	×	○	A	北	○	○	—
3	大洪水・大阪府下洪水遭難 賑恤金表	○	×	○	A	北	○	○	—
4	大洪水之図	○	×	○	B	東	×	○	2 銭 5 厘
5	摂河大洪水記聞 極本しらべ	○	○	○	B	南	○	×	—
6	大洪水細見之図 本しらべ	×	×	○	B	北	×	○	4 銭
7	大阪市中前代未聞大洪水之 略図	○	×	○	C	東	○	○	—
8	河内大阪近在本しらべ大洪水 之図	○	○	○	C	北	×	○	2 銭 5 厘
9	各国洪水飛報	○	○	×	×	—	×	×	—
10	攝河両国大洪水細見図	×	×	○	B	北	○	○	4 銭
11	大洪水細見之図 第貳号本 しらべ	×	×	○	B	北	○	○	5 銭
12	大阪攝河大洪水図	×	×	○	B	東	○	○	4 銭
13	暴雨洪水落橋砲発ノ画	×	×	×	×	—	×	×	5 厘
14	浪華大洪水一覽図	○	×	○	C	東	○	○	4 銭
15	大洪水末代断 第五号極細調	○	×	○	B	北	○	?	—
16	攝河大洪之図	○	○	○	B	北	○	×	—
17	河内摂津大洪水細見図	○	×	○	C	東	○	○	4 銭

地図タイプ A：枚方—網島付近、B：淀川—大和川—湾岸、C：大川—安治川—市街地

へ流れ込んだ濁流を青色で示す。地図に京街道を大きく示し、淀堤に「切所凡百間余、山川堤切口凡二十間余」と記し、土木課、警察の出張所の位置などを詳しく示す。「川南ハ不残大水、川北ハ水災ナシ」などと記す。また、川崎橋は中央で六間落ちているが、天満橋、京橋は被災していない。左上に説明文があり、宇治川や桂川が満水、久世橋は流出など京都の状況も記す。上欄外に青字で「流出伊加賀村人家34戸、土蔵17カ所」などの被害数を追記する。

- ② **大洪水** 6月24日に大阪南八〇寺町四丁目田中安治郎が出版したタテ長のもの。多色刷の地図で北を上にとり、枚方から造幣局、川崎橋付近までの淀川と左岸低地を描き、右端に生駒山を示す。伊加賀付近の破堤について淀堤は「切所凡百間、山川堤切口七間、五カ村樋」を記し、復旧に関わる大阪府、内務省土木局、土木課、警察署、監獄囚人出張所や救助小家の位置を詳しく示す。地図の内容は朝日新聞 6月23日発行第1901号掲載の枚方付近のものとほぼ同じである。また、説明文は左上と右下の2段にわたり記入、伊加賀村の流出人家34戸、土蔵17カ所などの被害数を右下に列記する。

- ③ **大洪水・大阪府下洪水遭難賑恤金表** ②から5日後の6月29日に同じ田中安治郎が発行し

たもの(図4)。右半部は②と同じ淀川左岸の地図、左半部に大阪府下洪水遭難賑恤金表を追加、紙面はよこ幅が②の約2倍になった。右半の地図では伊加賀付近の情報は②とほぼ同じで、大川左岸桜宮と大長寺間の堤防に「ハサトキレ百間」などの情報が追加されている。伊加賀の被害数などは削除された。賑恤金表には現金提供130件および米提供23件の住所と氏名などを5段にわたって記す。最高額は三十四国立銀行の千円。これは百円の百二十一国立銀行とともに大阪に設立された銀行で、両者は後に合併して三和銀行の前身となる。第2位は521円の堂島米商仲買で、米仲買人の強い財力を暗示する。また、造幣局の3人、神戸居留地10番館(エチ・アーレン商会)と86番館(ランガールト・クレンウオルト商会)<sup>(4)</sup>など各百円を提供した外国人の存在が目立つ。朝日新聞と社職人中からの各百円が記されている。米提供は10石から1石までを記載し、当時の災害義捐状況を示す貴重な情報といえよう。

④ **大洪水之図** 7月2日に大阪府東区本町の木村松之助が発行したタテ長のもの。東を上、下に西を置き、淀川と大和川の間と大阪湾岸の地図を示す。地図の精度は粗いが、郡名や集落名を赤で塗色する。地図の下に説明文、右端に流出した橋名などが赤色で記される。地図には枚方の「キレクチ」の他、流出した大川の4つの橋位置、「ヤマトハシ」の流出などが読み取れ、第2水害による被災を示す。また、△記号で淀川右岸および神崎、中津両川間の西成郡のウチミズを示す。右端には流出した20の橋名を列挙している。

⑤ **摂河大洪水記聞** 7月3日に東区南久宝寺町田中安治郎が発行した横長のもの。極本しらべと記す。地図は淀川と大和川の間および大阪湾岸を、南を上、北を下において描いた珍しい構図。上端の山並は生駒山を誤って南に置いたものか。精度は粗いが青色で浸水域を示す。上町をのぞく大阪市街地の大部分が被災したことが読み取れる。また、△印により内水を示す方法は④と極似する。「死者2千余人、救恤金凡4万円余」などと記す。右端に説明文をおき、左上に落橋した21の橋名を列記する。

⑥ **大洪水細見之図** 大阪府南区順慶町寄留の黒田一知により7月3日発行された。よこ長の大型地図で、左上にタイトルを枠付きで置く。淀川左岸と大阪湾岸までを北を上、南を下に描いた地図で、説明文はない。浸水域を青色で示し、郡や集落名および公的機関を赤で塗色している。河内平野と大阪西部が広く浸水し、天満、上町、船場、島之内などは浸水を免れたこと、大川に架かる多くの橋が流出していることが読み取れる。京街道は枚方で切断されている。

⑦ **大阪市中前代未聞大洪水之略図** 7月6日に北区老松町樋口新助が出版した横長多色刷の美しいもの(図5)。タイトルに7月1日至3日と記す。地図は上が東、西を下に置く配置

で、大川を中心に網島付近から安治川および木津川の下流までの大阪市街地が詳しく示される。浸水域を青で塗るとともに、7月3日午前の水量（浸水深度）を記号により8、9寸～1.4尺余、2～3尺余、4～5、6尺余、8、9尺余の4段階に分けて市中の浸水深を示す点で貴重である。西堀以東の船場、島之内や東天満は浸水を受けていない。また、市中の川と堀に架かる橋および落橋の位置と橋名を明瞭な表現で地図に示しておりで判読しやすい。中之島をはさむ土佐堀川と堂島川に架かる橋は難波北橋をのぞきすべて流出してしまっている。説明文を右上におく。

- ⑧ 河内大阪近在本しらべ大洪水之図 7月6日西区北堀江、石川萬助により発行。説明文を右側に、地図は北を上置く。大川から南は難波、西は安治川、木津川下流までの大阪市街地を中心に描き、大川と市街地内の川筋や堀およびそれらに架かる橋の位置を詳細に示す。落橋したものは地図に黒く塗っているが、大川とその下流のものに限られる。落橋した31の橋名を上段に列挙する。
- ⑨ 各国洪水飛報 7日に瀬原捨松が出版した縦長で5段組のユニークな版組（図6）。説明文と5枚の災害絵からなり地図を欠く。最上段は大坂四区及河内各郡実況と27の落橋名をあげ、次段には京都府下の洪水実況と福井県下の出水状況、次に堺大和橋及其近傍、山口県下周防岩国、以下2段にわたって伏見、中国四国九州、東海道、関東の水害状況を記す。本水害では大阪付近のほか日本各地で発生した被害状況を伝えるが、浸水と道路の不通に関する内容が中心である。大阪在住の地方出身者や旅行者に被災と道路不通の情報を伝えるもの。
- ⑩ 摂河両国大洪水細見図 京都上京区第26組木村栄次郎が7月7日に発行したもの。地図は北を上におき淀川および中津川以南の河内および大阪市街地を描く。説明文を欠くが、右端に生駒山を描き、浸水域は青色で示される。上町、船場、島之内、天満など浸水をまぬがれた地区が明瞭に読み取れる。この地図は⑥の大洪水細見之図とほぼ同一のものと推定される。
- ⑪ 大洪水細見図第貳号本しらべ 7月10日に大阪南区順慶町寄留黒田一知が⑥と同じタイトルで第貳号として1週間後に出版したもの（図7）。地図は北を上にして淀川と中津川以南の河内および市街地を描き、浸水域を青で示す点で⑥と同じである。これによれば、中津川から安治川、木津川下流までの大阪市街地を詳しく示し、落橋の位置と名前、非浸水域が判読できる。本田、川口、四貫島、西横堀と木津川間の7列の非浸水域、および天満、西天満、上町の浸水をまぬがれた地区が示される。また、大川をはじめ市中の多くの橋と橋名が示されている。大川に架かる多くの橋が流出したのに対して、堀に架る橋にはほとんど被災なし。しかし、次の点で⑥の地図とは異なる。右端の生駒山の詳しい描写、河内地域の集落名をギ



ッシリ書き込む。市中の堀の一部を省略し、東西両御堂、生玉、高津、今宮の各神社を描く。さらに、橋名を詳しく記入し方位も全く異なる記号を使う。これらから、新たに版を作成したと推定される。

- ⑫ **大阪攝河大洪水図** 北区天神筋町野口清兵衛が7月10日に出したもの。横長の地図で説明文を欠く。上を東にとるため南北は東西の2倍以上長く描かれ、淀川と神崎川以南から大和川まで、西は湾岸までを示す。上端に褐色の生駒連峰を描き、郡名を赤で示す。郡境を点線で記入している。水系および集落名を詳しく記し、浸水域を青色で示す。伊加賀の切所や野田村のワザトキレを記し、茨田郡に2隻、淀川郡に1隻の船を描き、浸水が広域にわたることを暗示する。大川に架かる破損した橋は位置を示すが、全流出したものは橋名のみ記入しており判読しにくい。また、木津川の新橋、松島、千代崎などの各橋が流出したことを示す。
- ⑬ **暴雨洪水落橋砲発ノ画** 10日に本田丁八百屋町角木村板として出版された。縦長で3枚の絵から構成され、絵中に説明文を入れる。上から順に洪水下の避難民と2隻の救助和船、天神橋落橋の光景、安治川橋の爆破の情景を描く。洪水、落橋、砲発の三題を時系列においたもの。説明文には、7月1日の再出水による河内各郡村、東成・住吉諸村の被災状況、2日午後4時天神橋が中央で折れ込み8時には京橋が落ちたこと、4日安治川橋に流木がかかり溢流したため鎮台工兵が橋を爆破したことを記す。
- ⑭ **浪華大洪水一覽図** 11日に大阪府南区横堀7丁目 白井貞次郎が出版した縦長の美しい印象を与えるもの(図8)。中央の地図は東を上にとり網島付近から安治川、木津川下流までの大阪市街地を描く。川や堀を青色で示し、落橋の位置を記す。凡例に「出水所(浅所・深所)、田地溺地、流没橋、切レ所」などと記す。下に3枚の洪水情景を描く絵が挿入される。右から順に「強水橋を押流す図」、「堰水押流る図」、「河水市中を溢る図」と称す。全体に行き届いた構成に仕上がっている。
- ⑮ **大洪水末代噺** 12日に大阪府東区博労町二丁目藤下茂三郎が出版したもので、タイトルに第五号極細調と記す。北を上にした横長の地図を示し、左上に説明文をおく。淀川、中津川以南、大和川以北の間と湾岸付近までを描く。川や堀を詳しく示し、川に沿う集落名を記す。郡名などを赤で、浸水域を青で塗るが精度はよくない。上町、船場、島之内の非浸水域および高津新地付近の浸水が注目される。京街道を太く示し、「山川堤、伊加賀きれくち凡百八十間」と記す。落橋の位置と橋名を示すものの判読がむづかしい。川崎橋より下流の流出は43橋と記す。

⑩ 攝河大洪水之図 大阪府東区安土町二丁目土岐篤太郎が15日に銅製版で出版したもの（図9）。北を上におき淀川、大川以南の大阪市街地と湾岸部の地図を大きく示す。説明文は左上におく。河内低地では水系と集落名を詳細に示し、生駒の山脚を力強く描いている。大阪市街地の街路と堀を詳細に描くが橋は破壊前の状況を示す。左上端に35の落橋名をまとめて表記する。

⑪ 河内摂津大洪水細見図 北区若松町山本壽一郎が7月18日に出版したもの（図10）。縦長の多色刷で、地図は東を上にとり大川、中津川以南の市街地を詳しく描く。大川や堀とそれらに架かる橋名および落橋位置を詳しく記す。浸水域を青で示し、上町や船場、天満、西堀以西の島状の非浸水域を微細に描く。道頓堀南方なんば村の浸水が注目される。詳しい水害の説明文を上段におく。全体によく配慮された構図で美しく仕上がっている。

#### 4. 考察

かわら版の内容と特徴を整理した表1および表2をもとに以下考察してみる。

1) サイズと色彩 用紙のサイズは横・縦とも21cmから78cmの大きさに収まる。また横40～50cm、縦30～40cm程度の横長のものが多数を占める。縦長のものが6点ある。つぎに、3色以上の多色刷は11点と最も多く、2色刷が4点、黒1色刷は2点のみである。

2) 発行月日 江戸期のかわら版は許可をえずに出版されていた（北原2001）。本水害に関する17点はすべて届出、許可をえて出版されている。明治政府による法的規制が厳しく守られている。届出日が不明な①を除き、届出と出版が同日のものが5点、届出の翌日出版が6点あり、約7割の11点は届出から2日以内に許可、出版されている。第1水害に関しては3点が発行され、最速は23日に黒田が出版した①である。第2水害では7月2日発行の④、3日発行の⑤、⑥が早く、つぎは6日以降になる。15日発行の⑩や18日発行の⑪には速報性はなく、記念品または保存用として発行されたのであろう。

3) 発行者 黒田一知および田中安治郎が各々3点を出版している。しかし、他の11名は1回のみの出版である。黒田は第1水害時に京都上京在住中に①を出し、その後大阪南区へ移って⑥および⑪の2点を出す。田中は大阪南区在住で第1水害2点、第2水害の⑤を出版したのが最後である。7月7日に⑩を出した木村栄次郎は京都上京在住である点は注目される。大阪の11人の住所は南区4名、北区および東区が各3名、西区1名となる。

4) 地図 地図は破堤、落橋、浸水域など水害情報を正確に伝える重要な手段である。地図を欠くものは⑨および⑬の2点のみ。残り15点は淀川や大阪付近の被災状況を示す地図を示し、火災かわら版と同様の特徴をもつ。タイトルに図と称するものが10点に達する。第1水害時の3点は枚方から網島付近までを示すが、第2水害時のものは被害が広域に及んだことを反映し

て大阪全域の広域地図を描く。方位に注目すると、北を上にくもの9点、東を上にくもの5点、唯一⑤のみが南を上にした構図もつ。大阪では生駒山がランドマークとして方角の目安にされてきたことを示す。

5) 説明文 説明文を持つものが12点、地図と説明文両方を示すものは11点あり、地図のみは3点だけである。内容的には浸水域や被災地を地図に示したかわら版が最も多い。⑪は被害絵3枚からなり、⑫は文のみからなる。落橋により土佐堀川などの南北交通が遮断されたため、通行不能の情報は橋のまち大阪では最重要の関心事であった。このため、7月7日に工兵隊が難波南橋に船橋を設置し、通行を確保している。落橋数をみると、7月2～3日で20、21、6日は31、9日は27、12日には42、35となり後ほど増加する。落橋数に混乱がみられるが、最大40に達した可能性が高い。大阪市中では大川および土佐堀川の川崎橋、天満橋、天神橋、難波南橋、栴檀木橋、淀屋橋、肥後橋、築前橋、常安橋、湊橋、堂島川の大江橋、渡邊橋、田蓑橋、玉江橋、堂島大橋、船津橋。木津川では亀井橋、大渡橋、松島橋、千代崎橋、安治川の端建蔵橋と安治川橋が落橋している。大川をはさんで南北交通が完全に遮断されたのである。

6) 新聞との比較 かわら版の価格は⑬の5厘以外では2銭5厘から5銭までである。一方、当時の朝日新聞の月額は25銭。日雇労働者の日給27銭、巡査の初任給は6円という状況<sup>(5)</sup>からみて新聞はかなり高価であり、必要な時に必要な情報を安価に入手できるかわら版は十分に存在価値があったと判断される。しかし、本水害以後ほとんど発行されなくなる。その理由として新聞の普及があげられる。朝日新聞の記事を検討すると、枚方切から6日目の6月23日に枚方切所付近の詳細地図を掲載、7月3日には第2水害による大阪市中の浸水と落橋を記入した地図を掲載している。さらに、被災地の状況を詳しく述べ、新情報が日々伝えられていく。また、義捐金募集を24日に掲載、以後提供者の住所、氏名を毎日記載し続けている。このように圧倒的な情報量により優位を示す。なお、7月4日には号外のみを発刊、6月25日に移転直後の中之島三丁目の事務所が全面浸水し、大川の南北通行が絶えたこと、新聞配達の手もふさがれたことを理由に号外以外一両日休刊する予告を伝えた。しかし、実際には休刊せず7月5日、6日も刊行を続けている。なお、1888(明治21)年磐梯山噴火や1891(明治24)年濃尾地震では写真とともに木版多色刷の錦絵が多数市場に出回ったといわれ、両者の共存を暗示している。

## 5. まとめ

1) 明治18年大阪水害は6月下旬の第1水害と7月初旬の第2水害からなる。これに関するかわら版が第1水害の3点、第2水害の14点が発行され、総計17点に達する。これらはいずれも届出、許可をえて出版された。17点中、3色以上の多色刷が11点、地図を描くものが15点、さらに浸水域を示すものは12点ある。多様な被災状況を正確に表現するために地図および多色

刷が用いられたと推定される。

2) 橋の多い大阪市中では橋の通行可否が最も重視され、落橋名やその位置がいち早く伝えられた。落橋数は7月2～3日の20件から6日に31件、12日には約40件と増えている。全体で約40件に達したと推定される。

3) 新聞は当時の物価からみてかなり高価であり、かわら版は必要な情報を安価に入手できる利点をもっていた。しかし、新聞の取材力と日刊による内容と情報量が圧倒的に多くその普及により、大阪地方のかわら版は本水害後急速に姿を消すことになる。

#### 〔謝辞〕

かわら版の閲覧と掲載に便宜と許可を与えられた東京大学地震研究所、三井文庫、荻谷市荻谷図書館、神戸大学社会科学系図書館、大阪歴史博物館、大阪市立中央図書館、大阪城博物館、大阪府立中之島図書館に謝意を表します。また、有意義な議論と激励をいただいた北原糸子、渡邊忠司、宮本裕次、船越幹央、梶原 修、木谷幹一、片山正彦の皆様には感謝します。

#### 〔注〕

- (1) 河内平野は淀川左岸水害豫防組合編（1929）『淀川左岸水害豫防組合誌中編』 附録図「明治十八年洪水浸水図」、大阪市街地はかわら版「大阪市中前代未聞大洪水之略図」をもとに作成した。
- (2) 府立大阪一等測候所（1904）『淀川出水豫報調査報告』により作成した。
- (3) かわら版の認定は基本的に版型が異なることを基準にした。したがって、多少の色違いや追加事項がある場合は同一物とみなした。
- (4) 居留地所有者は神戸市立博物館（1986）『神戸はじめ物語展』の「V 神戸外国人居留地商館の変遷」、90～104によった。
- (5) <http://sirakawa.b.lag.jp/coin/>による。

#### 〔参考文献〕（著者のABC順）

- 服部敬（1995）『近代地方政治と水利土木』、思文閣出版、385p、  
伊東宗裕（2008）京都の火災図—京都市歴史資料館大塚コレクションについて、京都歴史災害研究、9、13～20  
金子隆一（2005）1880年代における日本の写真状況と磐梯山噴火写真、中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会報告書「1888磐梯山噴火」、141～150  
北原糸子（2006）メディアとしての災害写真—明治中期の災害を中心に、『版画と写真—19世紀後半出来事とイメージの創出—』、73～95 神奈川大学  
北原糸子（2012）『メディア環境の近代化 災害写真を中心に』、お茶の水書房、116p  
北原糸子（2015）近代の災害、『日本歴史災害事典』143～151、吉川弘文館  
大阪府（1887）『洪水志』大阪府蔵版、90+24p  
坂道夫（1992）枚方切れのはなし、大阪春秋、68、46～51  
武岡充忠（1931）『淀川治水誌』、淀川治水誌刊行会、292p  
植村善博（2016）1885年大阪水害の被害と記録写真—1885（明治18）年淀川大洪水の研究 その1—、歴史学部論集、6、1～11  
植村善博・木谷幹一（2016）山口県公文書館および尼崎市立地域研究史料館所蔵の明治18年大阪水害写真について—1885（明治18）年淀川大洪水の研究 その2—、京都歴史災害研究、17、43～48

淀川百年史編集委員会編（1974）『淀川百年史』、近畿地方建設局、1822p

淀川左岸水害豫防組合編（1934）『明治十八年淀川の大洪水』、26p

（うえむら よしひろ 歴史文化学科）

2016年11月15日受理



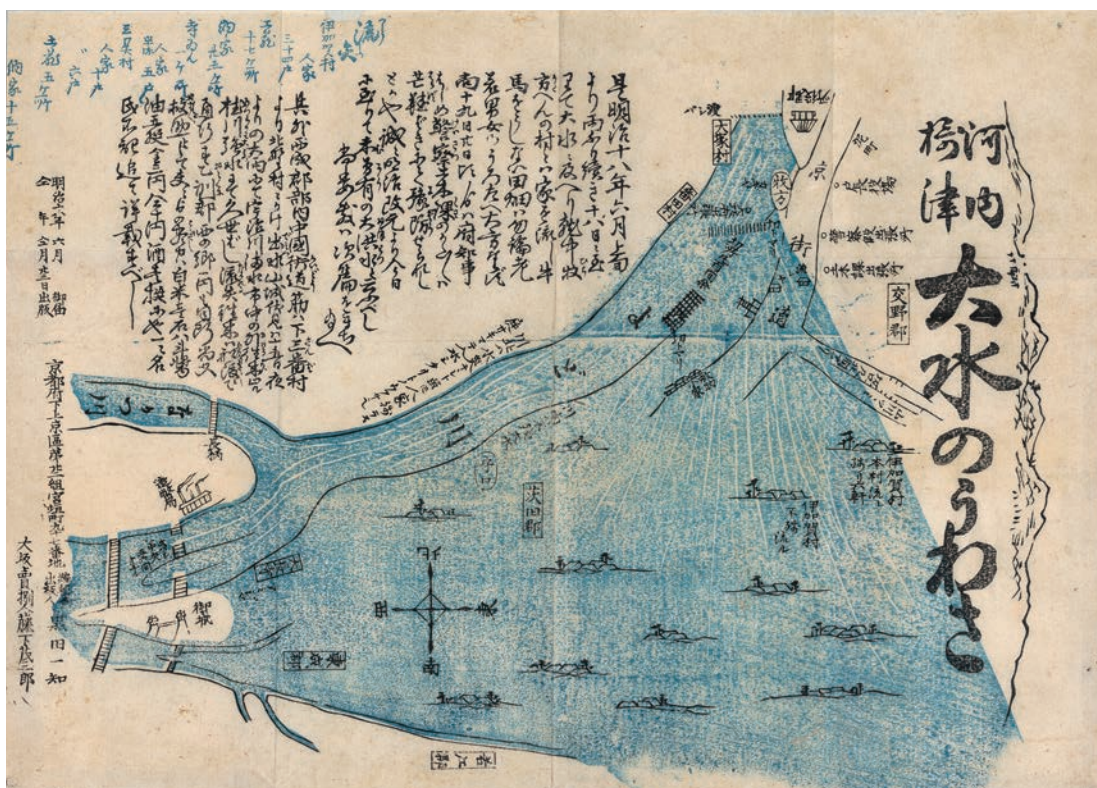


図3 ①河内摂津大水のうわさ（東京大学地震研究所蔵）

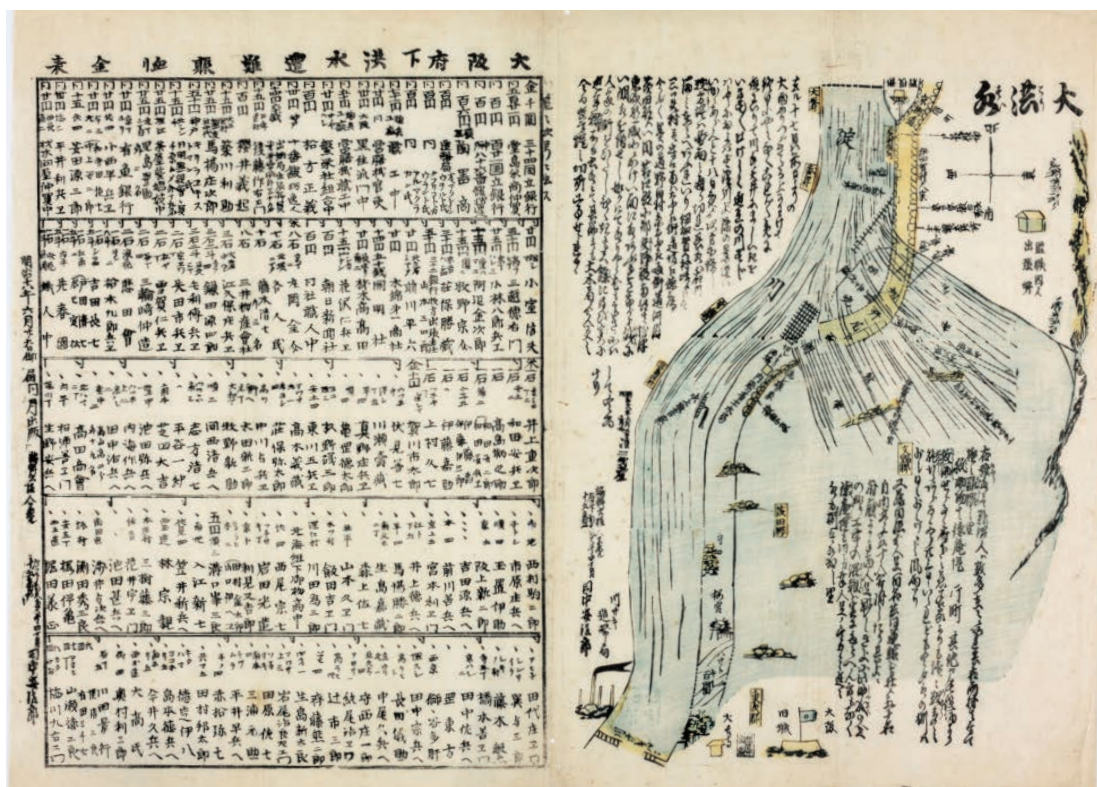


図4 ③大洪水・大阪府下洪水遭難賑恤金表（大阪市立中央図書館蔵）



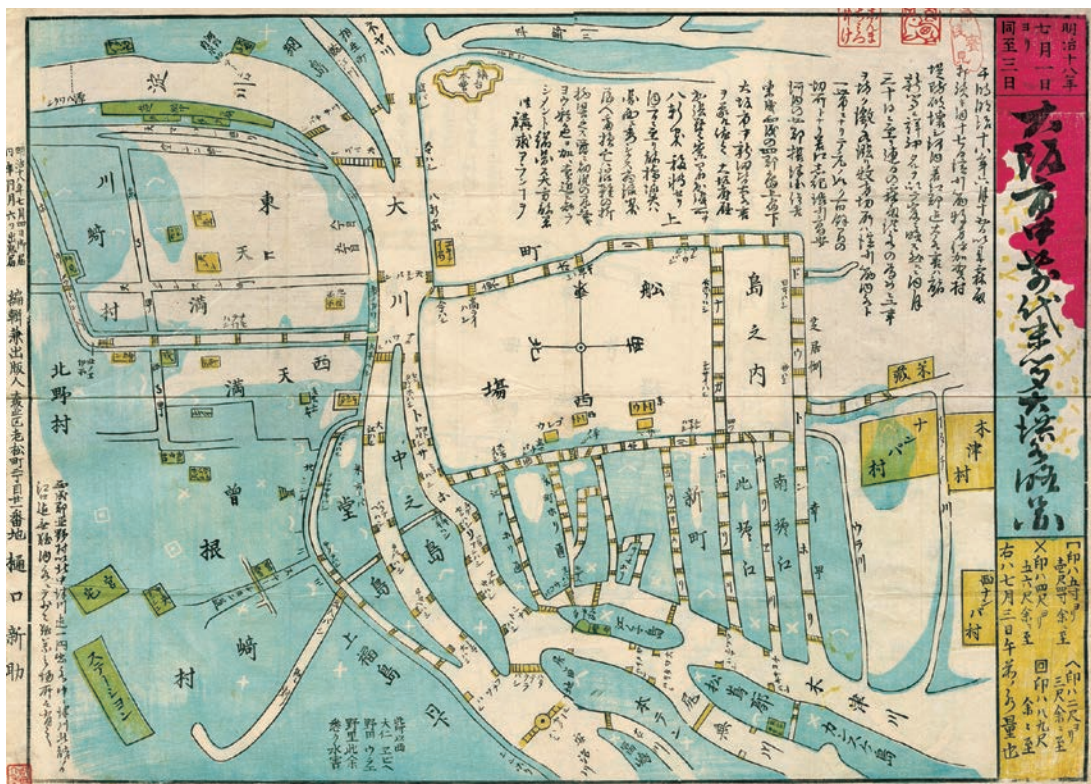


図5 ⑦大坂市中前代未聞大洪水之略図（三井文庫所蔵）

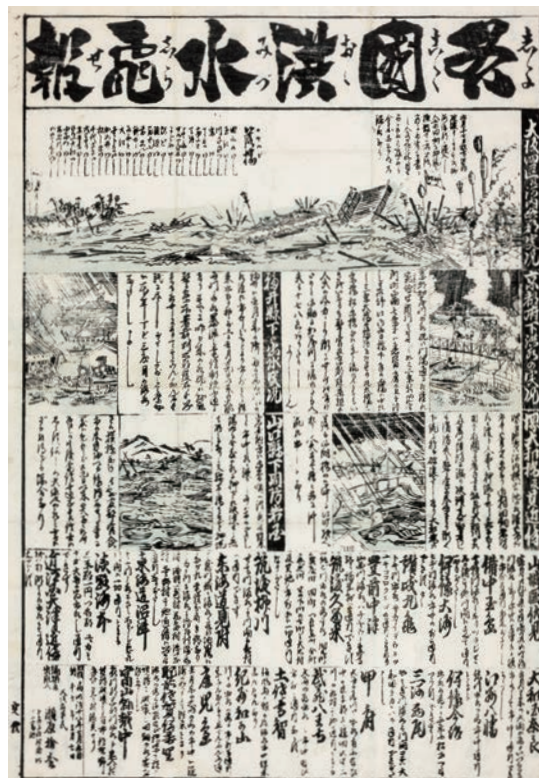


図6 ⑨万国洪水飛報（大阪市立中央図書館所蔵）





図7 ⑪大洪水細見之図第貳号本しらべ（大阪市立中央図書館所蔵）



図8 ⑭浪華大洪水一覽図（大阪府立中之島図書館所蔵）



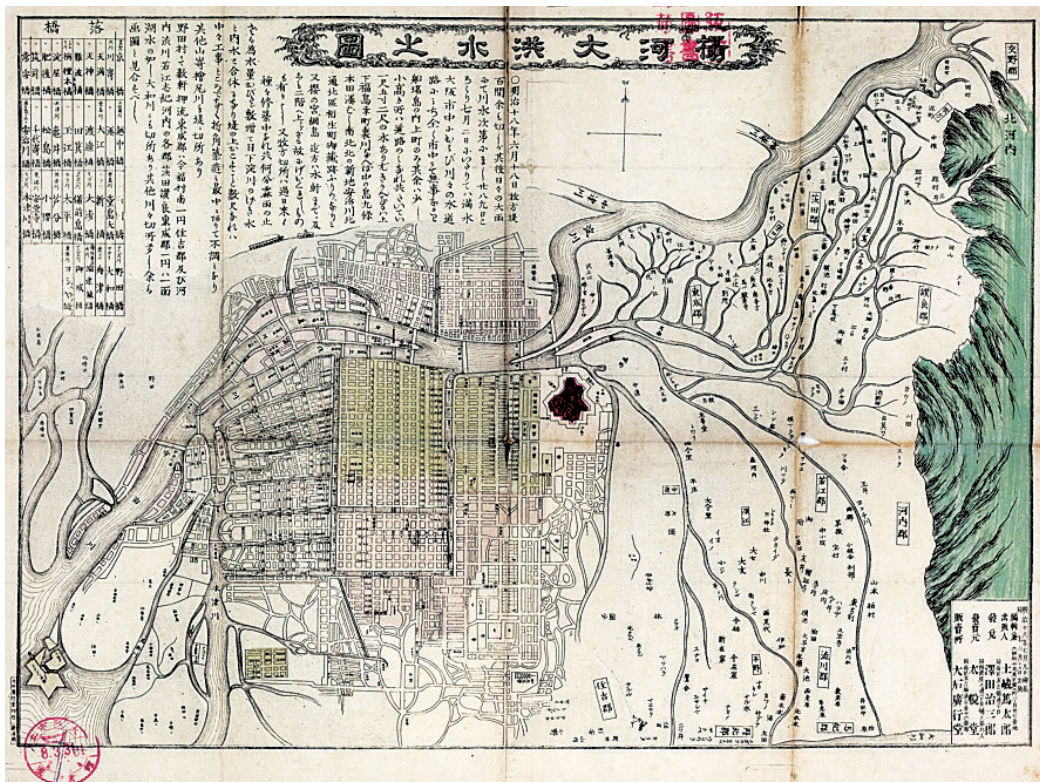


図9 ⑯大河洪水図 (大阪市立中央図書館所蔵)

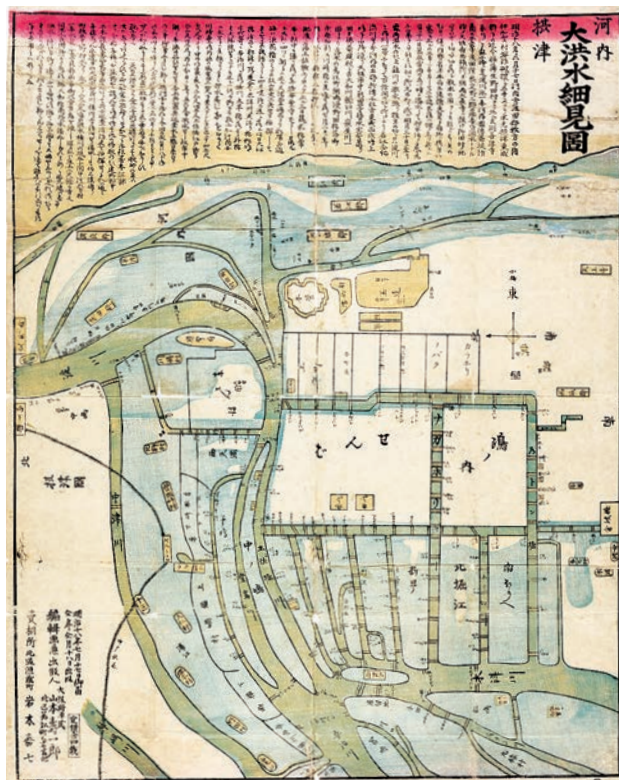


図10 ⑰河内摂津大河洪水細見図 (大阪市立中央図書館所蔵)